あとがき

いきなり私事で恐縮ですが、多摩美術大学に着任したのは、2020年、ちょうどコロナ禍がはじまった年でした。オンライン授業が続くので先生がたにも学生たちにもリアルでは会えず、右も左もわからないなか、前任の平出隆先生から仰せつかったのが研究紀要委員会の副委員長という任務でした。パンデミックの影響は、制作や研究にも多大な影響を及ぼしましたように思います。海外実地調査ができない時期が何年あったでしょうか。研究論文が少なくなった年もありました。

あれから4年。ようやく「パンデミック後」となった2023年度は、前委員長の永原康史先生のご退職にともない、委員長を仰せつかり、改めて「研究紀要」のあり方について考えさせられる1年となりました。今年度は、研究論文の数も増え、これまで球根のように蓄積されていた研究がいっきに花開いた感があります。

美術大学の「研究紀要」として、本研究紀要は、巻頭作品および制作ノート、研究報告と研究論文から構成されており多様なコンテンツが特徴です。研究論文の分野も多岐にわたり、毎回、査読者の選定に苦慮するほどです。しかしながら、永原前委員長と進めてきたのが、研究論文におけるフォーマットの統一でした。これまでは多様性を保つために、あえて揃えていなかったそうですが、AIの活用や盗用が大きな問題となる昨今、今まで通りの規範では、研究倫理上の正しさを担保できなくなってきたためです。こうした改革にご理解いただければ幸いです。

美術大学の研究紀要らしい「巻頭版画」についても、どこまでを「版画」にするのか、「版画」の可能性について、ここ数年、議論を重ねてきました。2021年度はリソグラフ、2022年度はシルクスクリーンでしたが、今年度はデジタル・イラストレーションをオフセット印刷し、一部に浮き出し加工を施した作品となりました。「巻頭版画」の自由度を高め、新しい「版画」ジャンルの展開に繋がればと、今後に期待しています。

最後になりましたが、ご寄稿くださった先生がた、査読の労を執ってくださった先生がた、紀要委員ならびに研究支援課のみなさん、巻頭版画をお引き受けくださった韮澤実月さん、ご協力くださったすべての方々にこの場をお借りして御礼申し上げます。

●金沢百枝

2024年3月